



2012年 (平成24年)
10月号 (No. 809)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

立山連峰の積雪と氷河

飯田 肇 (立山カルデラ砂防博物館)

今年4月、立山連峰・剣岳にある3つの万年雪「御前沢雪溪」「小窓雪溪」「三ノ窓雪溪」が、日本初の、現在も活動する氷河であると学術的に認められた。立山カルデラ砂防博物館では2009年から調査を続け、今回の発表に至った。調査の中心となった飯田肇会員に、立山連峰の積雪および、3つの氷河について説明してもらう。

■はじめに

立山連峰にはさまざまな時間スケールを持つ雪が存在する。春の立山の風物詩である雪の大谷「雪の壁」は季節積雪であるが、稜線付近には多年性雪溪が分布する。最近の研究から、とくに規模が大きな多年性雪溪のなかには、日本で唯一の現存する氷河があることが確認された。立山連峰の知られざる雪の姿を眺めてみよう。

■1年間の積雪

図1に、立山西斜面に沿った平野から立山までの積雪深の季節変化を示す。雪に覆われた期間をみると、標高10mの富山市内では1月から3月中旬までだが、標高2450mの室堂平では10月から7月中旬までとなり、なんと9カ月間も地面が顔を出さないことになる。

また、一般に標高が増すほど積

目次

立山連峰の積雪と氷河……………	1
カラコルムの未踏峰に登頂し 「ウメード・サル」(希望の峰)と命名…	5
第1回電子国土賞に本会推薦の 杉本智彦さんの「カシミール3D」が受賞…	6
会報『山』を通巻でとりそろえる…	8
東西南北……………	9
鴨下重彦会員を偲んで 支部だより……………	10
埼玉支部 活動報告……………	11
三水会 図書交換会出品目録および 購入申込みの案内……………	12
図書紹介……………	14
図書受入報告……………	14
会務報告……………	15
ルーム日誌……………	17
会員異動……………	17
新入会員……………	17
INFORMATION……………	18

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10～20時
水・金……………13～20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10～18時

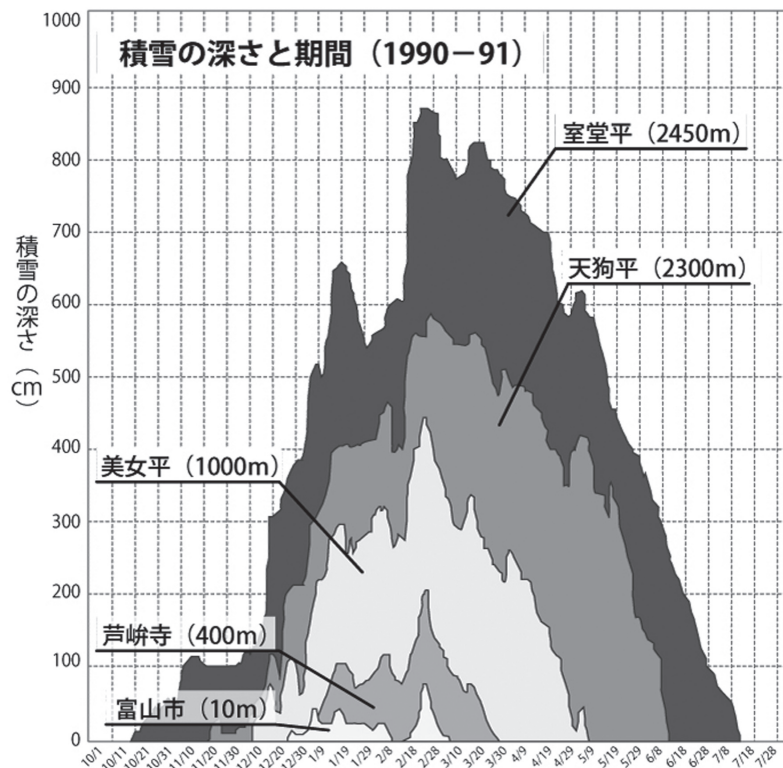


図1 立山西斜面沿いの標高別積雪深の季節変化 1990-91年冬期



写真1 雪の大谷「雪の壁」

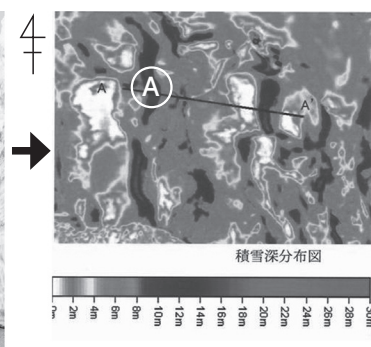


図2 室堂平(2450m)の積雪深分布

雪深が増え、富山市の最大積雪深が71センチなのにに対し、室堂平では870センチで、10倍以上の値となっている。一方、標高1000メートルの美女平では450センチで、ちょうど中間の値を示す。

春の立山の風物詩は、雪の大谷「雪の壁」だ(写真1)。雪の大谷は

室堂平でもとくに積雪が多い場所で、その積雪深は15～20メートルにも達する。立山のような高山では雪は風を伴って降るため、風で雪が吹き飛ばされる場所(吹き払い)と、風に運ばれた雪が溜まる場所(吹きだまり)ができる。雪の大谷は典型的な吹きだまりであるため、降雪と飛雪が合わさり多量の積雪深となる。まさに世界でも有数の

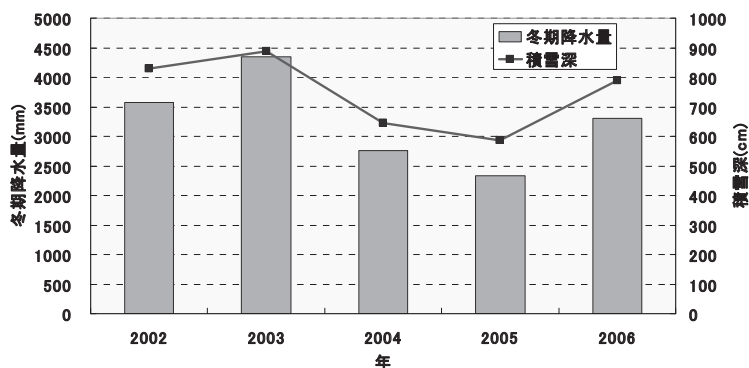


図3 室堂平の積雪深と冬期降水量

豪雪地帯である。

図2に、レーザースキャン測量で計測された雪の大谷付近の積雪深分布を示す(三田, 2008)。これより、雪の大谷(図2内「A」印)では積雪深が15～20メートルとなっているが、すぐ西側の尾根部では1メートル程度であり、大きな差がある。このような積雪深が風上側の尾根で少なく風下側の谷で多い傾向は、立山全体にみられる。さらに注目したいのは、雪の壁の積雪は晩夏から初秋までにすべて融けて消失してしまうことだ。多量に積もり多量に融けることが立山の積雪の大きな特徴といえる。

それでは、立山の降雪量(冬期降水量)はどのように測ればよいのだろうか。

高山では珍しく平坦な室堂平の積雪深は、その付近の降水量を反映した平均的な値を示すと考えられる。そこで、室堂平の平坦部において積雪深を多点で測定し、その平均値を示す地点で毎年3月下旬(最大積雪深時期)に積雪断面観測を実施している。

図3に2002年から2007年までの観測結果を示す。室堂

平の最大積雪深は6メートル9センチで推移している。また、室堂平の雪の密度は400キログラム/平方メートル500キログラム/平方メートルに達する。これより冬期降水量を求めると、5年間の最大値は2003年冬期の4345ミリ、最小値は2004年冬期の2759ミリとなった。5冬期間平均すると3264ミリで、冬期の雪だけでも3000ミリを超す降水量があることがわかる。富山市の年降水量の平年値は2245ミリで、室堂平の冬の雪だけで富山市の2年分の降水量にあたる。

■多年性雪溪

立山連峰の3000メートル級の主稜線の東側にはとくに積雪が多い地帯が存在する。冬期の間、北西の季節風とともに降雪がもたらされるため、稜線の風下側に多量の吹きだまりが発生し、さらに雪崩による堆積が加わってその積雪深は20メートル以上に達する。このような場所では、積雪は越年して残り続ける。これを「多年性雪溪」と呼んでいる。立山連峰には、御前沢雪溪、内蔵助雪溪、剣沢雪溪、三ノ窓雪溪、小窓雪溪などの多年性雪溪があり、日本で一番多く分布し

ている。
規模の大きな多年性雪溪のひ

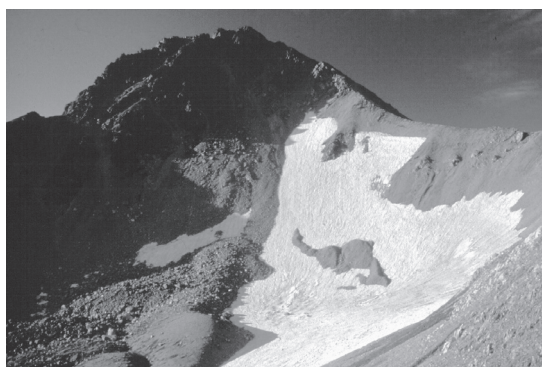


写真2 内蔵助雪溪全景

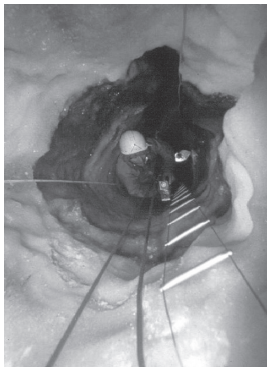


写真3 ムーランの観測

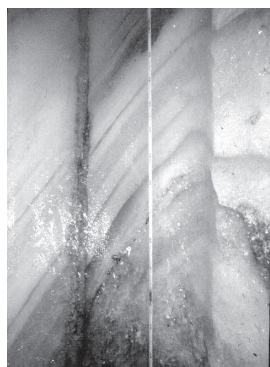


写真4 内部層構造

とつである内蔵助雪溪では、水体の詳しい調査が実施されている。

内蔵助雪溪は、立山(3015^{メートル})東面の内蔵助カール内に位置し、下部に厚さ30^{メートル}にも及ぶ氷体が存在する(写真2)。末端には氷河が存在した証拠となるエンドモレーンがみられる。残雪が少ない年の10月、大きさが最小になる頃に雪溪を訪ねると、まるでヒマラヤの氷河のような景観だ。雪溪表面に氷が露出し、幾筋もの水流がみられる。水の集まる所には氷の縦穴(ムーラン)が数十個口を開けていて深さは20^{メートル}に達する。

名古屋大学などによつてムーランに潜つての調査が実施された(写真3)ところ、穴の内壁からは、何層もの透明氷の層や汚れ層が見つかった(写真4)。また、5^{メートル}の深さを境に氷中に不整合面が存在し、その上部では氷の結晶粒が小さく、雪溪表面に近い水平な層構造をしているが、下部では40度以上の急傾斜で下流方向にせり上がり、氷の結晶粒も飛躍的に大きくなっていた。さらに底部では、底の岩石が氷の層に沿って持ち上げられた、氷河の流動の痕跡を示すスラスト構造もみられた(飯田他、

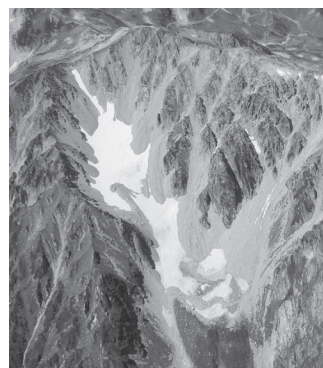


写真5 御前沢雪溪



写真6 三ノ窓雪溪・小窓雪溪

1990)。

さらに、底近くの氷中から木片及び葉片を採取し年代測定を行なったところ、約1700年前という結果が得られた。不整合面の少し下の層より採取された木片は約900年前という結果を示した(樋口他、1988)。これらの結果から、下部の氷体は約900(1700年前に形成されたものであると推定され、日本最古の氷河氷ということが出来る。

これらより、内蔵助雪溪はかつ

て存在した氷河の水が融けきらずに残存している、いわば「氷河の化石」であることがわかった。現在のところ内蔵助雪溪では氷体の流動が観測されておらず、現存する氷河と確認するには至っていない。

■現存する氷河

氷河とは、「重力によつて長期間にわたり連続して流動する雪氷体」(日本雪氷学会編『雪と氷の辞典』、2005年)と定義され、厚い氷体をもつこと、氷体が流動していることがその条件となる。

それでは、立山連峰の多年性雪溪のなかに氷河は現存していないだろうか。

このことを確認するために、立山カルデラ砂防博物館の研究チーム(福井幸太郎、飯田肇)は、立山連峰に存在する多年性雪溪のなかでとくに厚い氷体をもつ、立山東面の御前沢雪溪(写真5)、剣岳東面の三ノ窓雪溪、小窓雪溪(写真6)において氷の厚さと流動の観測を実施した。

剣岳にある小窓雪溪および三ノ窓雪溪では、2011年6月にアイスレーダー観測を行ない、厚

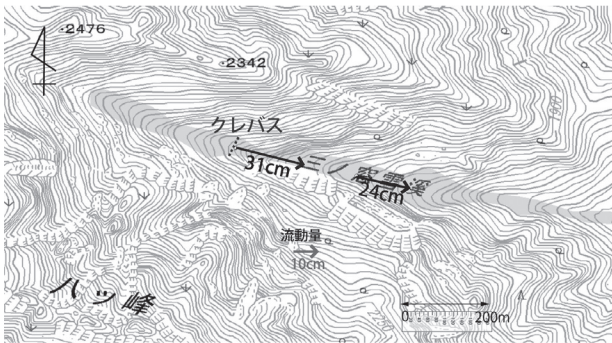


図5 三ノ窓雪溪の水体の流動量(2011年9月17～10月18日／31日間)

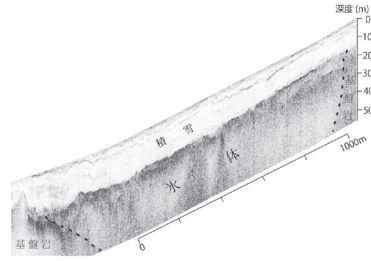


図4 三ノ窓雪溪の水体系断面図

さ30メートル以上、長さ9000～1200メートルに達する日本最大級の長大な氷体の存在を確認した(図4)。
また、同年9～10月に行なった

高精度GPSを使った流動観測の結果、小窓、三ノ窓両雪溪の氷体では、1カ月間に最大30センチを超える比較的大きな水平方向の流動が観測された(図5)。流動観測を行なった秋の時期は融雪末期にあたり、積雪荷重がもつとも小さく流動速度が1年でもつとも小さい時期にあたると考えられる。このため、小窓雪溪および三ノ窓両雪溪は、日本では未報告であった現存する「氷河」とであると考えられる。

立山東面の御前沢雪溪では、2009年秋にアイスレーダー観測を行ない、雪溪下流部に厚さ27メートル、長さ約400メートルの氷体を確認した。2010年と11年の秋に高精度GPSを使って氷体の流動観測を行なった結果、誤差以上の有意な水平方向の流動が観測された。流動速度は1カ月あたり10センチ以下と小さいものの、2年連続で秋の時期に流動していることから、御前沢雪溪も現存する「氷河」とであると考えられる。

これらの結果は、日本雪氷学会に学術論文として投稿、受理され、立山・剣岳の3つの多年性雪溪は現存する氷河と学術的に認められた(福井・飯田、2012)。

これにより、極東地域の氷河の南限が、カムチャツカ半島から立山まで大きく南下することになる。



■おわりに

これまで見てきたように、立山連峰の雪は、その量、質、時間スケールで国内に比類のないさまざまな特色をもつ。また、世界的に見ても、ひと冬で20メートル近く積もつた雪がひと夏ですべて融解するような現象はたいへん珍しい。さらに、氷河が現存することが確認されたことにより、立山連峰の雪氷の学術的な価値がより高まったと考えられる。

これを契機に、まだ未知の部分の多い立山連峰の雪氷についての今後のますますの調査研究が期待される。

参考文献

- Hajime IIDA: Characteristics of Snow Distribution on the West Facing Slope of Mt. Tateyama, Northern Japanese Alps (2008) Proceedings of 36th IAH Congress, T5, 1-6.
- 飯田 肇・竹中修平・上田 豊・伏見碩二(1990)：北アルプス内蔵助雪溪氷体の内部構造・樋口敬二編：日本最古の化石氷体(北アルプス内蔵助沢)の構造と形状に関する研究・平成元年度科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書、19—30・樋口敬二・山本勝弘・吉田稔・大畑哲夫(1988)：北アルプス内蔵助雪溪の下部氷体の形成年代について・名古屋大学加速器質量分析計業務報告書(1)、33—35・福井幸太郎・飯田 肇(2012)：飛騨山脈、立山・剣岳の3つの多年性雪溪の氷厚と流動—日本に現存する氷河の可能性について—雪氷、88・

トピックス

カラコルムの未踏峰に登頂し 「ウメード・サール」(希望の峰)と命名

福島支部長 大谷 司

2012年は、日本山岳会福島支部創立65周年記念行事として初の海外登山を行ないました。「個人的希望だが」と前置された在日パキスタン大使の薦めもあり、「日本・パキスタン国交樹立60周年記念、日・パ合同カラコルム登山隊」を編成しました。折から、中国でも同じく国交樹立60周年を記念し、スペイン・イタリ合同登山隊を組織した経緯もあります。

福島支部の日本人15名(平均年



長いキャラバンでは、馬も使い隊の荷物を運んだ

齢64歳)とパキスタン人5名の隊は、7月上旬から約1ヵ月間、パキスタンの北部にあるシムシャール地域のレッサー・カラコルムにある約6000m級の未踏峰へ挑戦し、併せて周辺一帯の調査も行ないました。

昨年の東日本大震災と津波、原発事故発生により一時は計画の中止も検討されましたが、支部会員の後押しもあり、被災地をはじめ東北の「復興」を願い、県のスロー



3日間あまりにおよぶキャラバンを歩く



未踏峰に登頂した隊員たち

ガン「ふくしまからはじめよう」に賛同して計画が実現したのであります。

登攀隊の日本隊員3名とパキスタン隊員4名は、未踏峰(旧高度6028m)に挑み、無事初登頂に成功しました。

この未踏峰について、幸いにもシムシャールの方々の賛同を得て復興を願うワヒ語で「ウメード・イ・サール」(希望の峰)と命名しました。しかしそののちの登録時になり、「ウメード・イ・サール」というワヒ語は、パキスタンの国語にあたるウルドゥ語より転化した言葉とわかり、正式には「ウメード・サール」という山名になりました。

ました。

一方学術隊は、多くの植物や昆虫類を採集してきました。結果については専門家の協力も得て分類、整理する予定です。なお地名と付近の特徴、標高ごとの隊員の動脈血中酸素濃度の比較、ギズール川周辺のシーナ語について、シムシャールのワヒ語の地名の変遷、地形図の作成なども、併せて行なっています。

またウメード・サール山頂には、支部設立に尽力された初代支部長・伊藤弥十郎氏と、計画半ばにして急逝された学術副隊長・吉田元氏の遺影を納めてきました。

予想を超えるキャラバンの厳しさに圧倒され、熟年隊では計画通りの行動が出来ませんでしたが一峰だけとはいえ初登頂をみやげに全員無事に帰国できたことに感謝しつつ、同時に12月の創立65周年式典に華を添えることができたことと喜んでおります。

隊の構成

本部長 大谷 司

(日本山岳会福島支部 支部長)

副本部長 小林正彦

(日本山岳会福島支部 副支部長)



無事登頂・下山後、ベースキャンプにて

事務局長 逸見征勝

(日本山岳会福島支部 事務局長)

(日本隊)

総隊長 宮森常雄、遠征隊長 佐藤一夫、副隊長兼総務 渡辺健二、

副隊長兼登攀隊長 清野義美、登攀副隊長 古川英勝

登攀隊長 渡部展雄、小柳安弘、

齋藤喜市、沼田 渉、

学術隊長 佐々木秀雄、学術副隊長 熊谷鶴三

学術隊員 菊池道彦、石井洋子、

三瓶恵子、宮森優子

(パキスタン隊)

副隊長兼登攀副隊長 ノール・ウル・

アミン以下、通訳、登攀メンパー、

ハイポーター、ポーターほか

トピックス

第1回電子国土賞に本会推薦の
杉本智彦さんの「カシミール3D」が受賞

推薦への経緯

登山活動において地図は必須である。最近では、紙ベースから電子化が進み、国土地理院でも数値データを公開している。

このような趨勢のなかで、国土地理院では、電子国土基本図などのデータを活用し、地理空間情報の高度活用社会に貢献するGIS (Geographic Information System) ソフトウェアとGISコンテンツのなかから、優れたものを「電子国土賞」として表彰する制度を本年度から発足させた。

公益法人としてスタートして間もない本会にも、候補者を推薦する団体となるよう要請があり、4月11日開催の理事会で承認された(推薦団体は関係学会など23団体)。これを受けて、4月23日に国土地理院から具体的な推薦依頼が寄せられた。公募期間が5月15日までと差し迫っていたため、4月26日開催の常務理事会で、本会の

ホームページで周知し、会員・非会員を問わず候補者を募集することにした。

5月8日の本会の締め切りまでに4件の問い合わせがあったが、最終的には杉本智彦さんの「カシミール3D」1件の応募となった。カシミール3Dは登山愛好家のあいだではよく利用されており、YOUTH CLUBでも講演を依頼していることから、杉本さんの推薦が5月9日開催の理事会で決定した。

国土地理院では、一次審査(書類)でノミネートされた作品について二次審査(デモンストレーション)がある。カシミール3DはGISソフトウェアのPC部門において、ノミネートされた29点のなかから優秀賞4作品のひとつに選ばれた。表彰式は6月22日に行なわれ、表彰作品には、「電子国土賞」のロゴマークが与えられる。杉本さんの作品の概要と選考理由は、以下のページで公開されている。

<http://psgsv.gsi.go.jp/koukyou/g-award/index.html>

(常務理事 森 武昭)

「カシミール3D」講演会

8月28日、ルームにおいてYOUTH CLUBの基礎講習会の一環として、「カシミール3Dの正しい使い方」と題し、杉本智彦さんに講演をお願いした。今回は、会員からの要望もあり、年齢制限を設けず実施したところ、34人の参加があった。

杉本さんは、こうした講演は初めてのことだが慣れた様子で、おもしろく聴き入ってしまった。これまでカシミール3Dに関する講習会は何度か行なってきたが本人だけあって、これまでよくわからなかった機能ややり方について、目からウロコの話を多々聞くことができた。そしてカシミール3Dが遊び心いっぱいで作られていることがわかり、興味深かった。

杉本さんの山好きは、今春に上梓された『超展望の山々』(実業之日本社)にも伺えるが、カシミール3D制作に費やした労力が並大抵のものでないことは推測できる。今回の講演は電子国土賞受賞前に

受賞にあたって

(理事 永田弘太郎)

決まっていたが、受賞によって記念公演ともなった。杉本さんの今後の一層の活躍に期待したい。



カシミールについて杉本智彦さん(スクリーンの左)が講演

今回の電子国土賞受賞につきましては、日本山岳会の推薦をいただいて、はじめて賞の審査対象としてノミネートしていただくことができました。推薦をいただけないと候補にもなりませんので、大変感謝しております。

「カシミール3D」は、もともと山岳展望を解析するための用途として使用する「可視マップ」を作成

するソフトとして出発しましたが、私自身が山好き、地形好き、地図好きであり、自分がほしい機能を追加していくうちにいまのような形となりました。

そのなかには、山の思い出を自分のイメージ通りに風景として再現できたら、という思いから作った機能がありました。幸い、たくさんの方々に使っていただき、ときにはうれしい話をお聞きしましたこともあります。

なんらかの理由で山へ行けなくなったが、今はカシミールを使って往時の思い出を辿ったり、山への思いを形にできているというお便りをいただくことがありました。このようなお話をいただくことは、作者の何よりの励みとなっております。

これからも地道に改良が続けて、地図やGPSなどを通して、山を愛する方はもとより、少しでも多くの方の役に立てるソフトであり続けたいと思っています。

このたびは本当にありがとうございます。ございました。

(受賞者 杉本智彦)

学生部「マラソン大会」「クライミング大会」のお知らせ

学生部のマラソン大会は今年で49回目を迎えます。また今年から、マラソン大会の翌日にクライミング大会も実施します。宿泊希望の参加者には、宿泊施設の用意もあります。関東・東海以外からの参加希望があれば、お問い合わせください。

◆第1回 日本山岳会学生部クライミング大会
【期日】2012年11月10日(土) 9:00集合 15:00閉会式、解散
後17:30～神奈川大学横浜キャンパスへ移動し、懇親会
【場所】皇居外苑・桜田門(スタート、ゴール地点)集合
【問合せ・申込】 東京理科大学 高橋惇郎
TEL080-6034-2980 E-mail junro.takahashi@gmail.com

◆第1回 日本山岳会学生部クライミング大会
【期日】2012年11月11日(日) 8:30集合 17:00解散
【場所】神奈川大学横浜キャンパスグラウンド
【問合せ・申込】 神奈川大学 斉藤暢甫
TEL080-3564-1648 E-mail optimistic.nobu@gmail.com

スパンティーク登山隊参加者 募集

海外委員会

昨年のネパール・ヒマラヤ遠征に引き続き、2013年はパキスタン・カラコルムのスパンティーク峰(7027m)を計画しております。

同峰はカラコルムのなかでも人気の高い山で、毎年多くの登山隊をひきつけています。

参加者自身で計画を立て実行するため、集会や高所順応訓練などに参加をしていただきます。年齢は問いませんが、身体健康で、北アルプスなどの冬山テント山行を現役として実践している方の参加を期待します。

費用は参加者人数や力量で変わるため未定です。また、各自で山岳保険に加入していただきます。

会員の積極的な参加をお願いします。



時期 2013年7月中旬より約35日間

申込 海外委員担当・竹花晃へ TEL&FAX 0476-97-0782

e-mail takepokhara@gmail.com

*但し、11月14日まで不在になります

締切 11月30日(金)

トピックス

会報『山』を通巻でとりそろえる

黒田正雄

かねてから懸案であった会報『山』の1号から800号までを通巻でとりそろえることができた。

そのきっかけとなったのは、会報『山』800号に寄せられた南川

金一氏の「井戸を掘った者を忘れず」の一文である。そこには、大修館が発行した会報の復刻版(1

〜200号)をベースにして、自分が入会する前までの欠番(201〜465号)をかなりの苦勞をして蒐集したことが書かれていた。さらに、氏が通巻とりそろえたことと、通巻で所持する会員は五指

に満たないだろう、とも書かれていた。これを読んで、高齢で身辺整理をすすめている私も、この際所持している会報を補完して、きっちり整理しなければと、思ったのである。

私の場合、大修館の復刻版を持つているので、201号から入会前までの318号、つまり118号分を集めなければならない。調べてみると、かつて図書交換会などのおりに、会が残余の会報を放

出したことがあり、そこで収得していたものが57号分あった。よって実際の欠番は61号分だけということが判明した。

当会の図書室には、会報はすべて保存されている。それをコピーさせてもらえば済むことだが、長いことためらって放置していた。それは、図書室の会報は製本されていて両面コピーができない、2

ページを見開きでコピーすると綴じ代の関係で袋綴じとなり製本したものに袋綴じが混ざる、そんなことに抵抗を感じていた。

盛夏の一日、コピーで欠番を補完する心づもりでルームを訪れた。作業をしていると、事務局の方が見かねて相談にのってくれた。また、このことを伝え聞いた南川氏からも援助の申し出をいただいた。そんな幸運な手助けもあって、なんと61号分を両面コピーで補完することができた。いずれ製本するつもりでいる。

その後、残暑が厳しいある日、ルームにお礼にあがった。そこで

待ち合わせた南川氏と3時間にもわたって懇談した。本来なら夕刻ビアガーデンなどで歓談したかったのだが、氏はそちらの方はダメなのである。無人の図書室での会話は、蔵書の背を眺めながら多岐に渡った。南川氏との会報についての会話のなから、記憶に残る断片をここに記しておく。

*

・通巻そろえる上で、やはり創立70周年記念で出された200号までの復刻版の存在は大きい。あれがなければちよつと手が出ません。それがあつてか、通巻で所持する会員は五指に満たないと言いましたが、実際はもつとおられるようです。

・古い会報に目を通してると、今は亡き雲の上のような方々の息づかいが、紙面から立ちのぼってくるようです。

・会報には会の歴史の断面が埋め込まれていますね。いや、歴史そのもの。会の一級資料でしょう。・その人の著書にも入らなかつた文もたくさんあるし、人事の仄聞なども面白いです。

・会の図書室には全巻が保存されているけれど、創立時からの会員

は存在しないのだから、個人会員がそろえ持ったとすれば、それは大きな財産でしょう。

・その財産は人から人へと受け継がれていかなければ、と思います。有償とか無償とかに関係なく、ということですよ。

・会の図書室の保存本が基本となるけれど、利用できる人は限られます。将来復刻版が出ればともかく、個人会員もそれを保持し受け継いでいく、これも大事なことでしよう。

・1975年に出た復刻版第1集(1〜100号)が1万2000円、第2集(101〜200号)が1万4000円でした。もし、500号までが復刻されたとなると、7万円にはなります。いくら貴重な資料と分かつていても、手が出かねる値段です。会も出版社も、なかなか刊行に踏み切れないのではないでしょう。

*

今回、事務局と南川氏のご協力をいただき、会報を通巻でとりそろえることができたことに心より感謝申しあげたい。そしてしみじみ「井戸を掘った者を忘れず」の言葉の重さを感じた次第です。

東 西 南 北

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

鴨下重彦会員を偲んで

小清水敏昌

昨年12月4日、国際基督教大学(ICU)礼拝堂で、鴨下重彦氏(会員番号11767)の「お別れ会」が900人以上の参列者のもと、しめやかに行なわれた。亡くなったのは11月10日(享年77)であった。

私と氏との出会いは10年以上前の晩餐会会場である。三水会の酒匂輝昌氏が、私が鴨下氏と同じ病院勤務の医療人だということで紹介してくれたのがご縁であった。氏は医師であり、大学病院の小児科教授や国際医療センターの院長、総長も歴任。さらに、厚労省のさまざまな会議の座長なども務めており、多忙な日々を過ごされていた。

その鴨下氏が、2000年に三

百名山を七面山で迎えたとき、本当に驚いた。氏が、深田クラブの会長も務めておられた頃、クラブの山の紀行文集を戴いたこともあった。一昨年の年賀状は、ちょうど三百名山の一つ手前の記録を示した内容であり、驚いた。

思い出は一昨年の晩餐会、同じテーブルで一緒にできたこと。晩餐会直前に氏からハガキが届いた。ハガキには、「当日は会議のため少し遅れるので席を取っておいてほしい」と書かれてあり、同じテーブルで歓談した次第。そのとき、一緒に写した写真をいまでも大切に持っている。昨年の晩餐会に先生とまた一緒にいたいと考え、11月20日ごろ手紙を出した。ところが、11月10日の朝方逝去、受取人のいない手紙になってしまった。

鴨下氏は北海道室蘭に生まれた。北海道大学に入学したものの退学、東大医学部に入り小児科医

になった。それから栃木県に創設された自治医科大学の小児科教授として、11年間ものあいだ地域の医療に貢献する医師を育てることに情熱を燃やした。その後、東大に戻り小児科教授を経て東大医学部長に就任。小児科から医学部長になったのは氏が初めてだという。

それだけ周りから信頼があったのでしようと、牧師がおっしゃっていた。その後、国際医療センター院長を経て総長になり、定年後は錦糸町にあるベッド数243床の賛育会病院の院長に就いた。

驚くのは、そんな多忙な日々にもかかわらず山にも入れ込んでいたことだ。百名山達成を皮切りに、1998年には二百名山を赤牛岳で、そして2000年に三百名山を七面山で達成された。医師という仕事を抱えながらのこの快挙は実に凄いことだ。心から敬服してやまない。

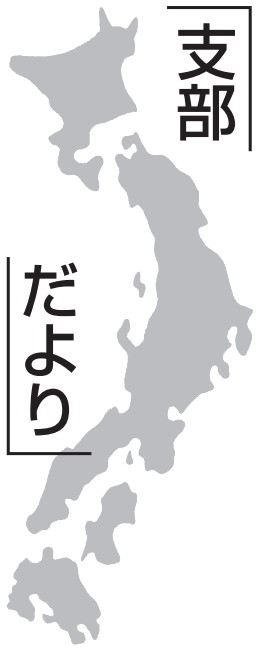
また、氏はクリスチャンであり、東大時代に内村鑑三や矢内原忠雄の影響を受け、宗教としてキリスト教を学んだといわれている。だが、キリスト教を強引には家族にも友達にも勧めなかった。自分が良いと思うなら入信すればいい、

そんなソフトな考え方であったようだ。

葬儀のときに歌う讃美歌と聖書からの言葉は、生前、氏が自ら選らんだものだという。それを牧師が披露した。それゆえ賛美歌を歌っても、牧師の聖書の言葉を聞いても、すぐそばに鴨下氏を感じた。牧師いわく、「鴨下氏の想いと願いが魂の声となって皆さまに聞こえていることでしょう」と。

一周忌を迎えるにあたり、改めてご冥福をお祈り致します。

支部



だより

全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

埼玉支部

インドネシア、クリンチ山登山

支部設立3周年記念行事の一環として、7月6日から15日の10日間、参加者11名(会員10名とその家族1名)でインドネシア・スマトラ島の最高峰であるクリンチ山(3805^{メートル})に登山した。

西スマトラ州の州都であるパダンには赤道直下だけに直射日光が眩しく、パダン料理で知られている。また、空港、学校、ホテルの一部は、水牛の角を象徴した両端が天高く突き出ている屋根をもつ伝統的な建物が印象的であった。

クリンチ山の登山口であるクルシクトウオへは、パダンからミナンカバウ文化の中心地であるブキティンギで1泊し、まる一日の貸切バスの旅を要する。山麓一面に広がるお茶畑の上に、富士山によく似た山容のクリンチ山が正

面に眺められる。

登山初日は、足慣らしを兼ねてクリンチ山から少し離れたトゥジュ山(7つの峰を持つ山の意味で最高峰は2604^{メートル})の1峰と、その奥のカルデラ湖に登った。登山道は熱帯雨林に覆われ眺望はまったくきかなかつたが、幸いにも天候に恵まれ、珍しい花を眺めながら登山を楽しむことができた。熱帯地域にもかかわらず花は予想外に小ぶりで、お花畑らしい場所はなく、種類も少ないのは意外であった。行動時間は約7時間である。よく整備された登山道のため、普段はどのような人たちが山登りをするのか興味があつた。湖からの下山時に、登ってくる地元の若者たちに会い、スマトラでも登山は国民に支持されていることを感じた。

いよいよ、1泊2日のクリンチ山登山だ。早朝、立派な門がある



クリンチ山シェルター3(テントサイト)にて

登山口までバスで行く。歩き始めは平坦な密林帯で「ココ、ココ」と騒々しいサルの鳴き声に送られながら、しつかりと整備された登山道をゆつくりと登る。途中に屋根のある休憩所があり、傍らの大木には標高が記載されたプレートが打ちつけられていた。また、登山道の途中にはシェルターと名づけられたテントサイトが数カ所に設置されている。

火山灰の赤土がむき出しの登山道は登るにつれて傾斜が急となり、降雨のためか無残にも背丈を超える溝となっていた。道が掘れるほど登山者数が多いとはとても思えなかったが、これも一種の自

然破壊なのであろうか。本日のテントサイトであるシェルター3は標高が約3200^{メートル}、森林限界であるため展望は良好であった。昨日登ったトゥジュ連山や、麓の民家が一望のものである。今夜はここに宿泊する。

夜明け前、シェルター3を出発。ヘッドライトの光を頼りに、一列になつて火山岩のガラガラとした道を登る。あたりが薄明るくなつたころ傾斜が緩くなり、クリンチ山頂についた。日の出の方向はガストについて視界不良であったが、クルシクトウオ方面の眺望は申

し分ない。赤道直下にもかかわらず山頂は予想外に寒く、重ね着が必要なほどであった。山頂からの展望を十分に楽しんだ後、テントサイトを経由して、深く溝の掘れた赤土の道を岩と木の枝や根を頼りに登山口へと下る。登山口手前で遂にスコールにあい、泥だらけになりながらバスにたどり着き、全員無事に下山となった。

1泊2日のクリンチ山登山は、技術的な問題はまったくなかったが、体力的に余裕のない人にとっては登り下りとなった。全般的には天候に恵まれ、鬱蒼とした熱帯雨林と数メートルもの溝が掘られた急な登山道が印象に残るスマトラ島最高峰のクリンチ山に計画通りに登頂できた。

また、登山の前数日は島の多様な文化、民族、景観に接することができ、会員相互の親睦も深められた。ミナンカバウ文化を象徴するパダン料理はどこに行ってもワンパターンで、痺れるような激辛のトウガラシ味と、噛みきれないほど堅い牛肉や骨だけの鶏肉など、ここでは味わえない貴重な経験となった。

(松本敏夫)

活動報告

三水会

アニコロ餅と薬湯の集い

昭和52年、山研が開所して間もないころ、諸先輩により始められたこの「アニコロ餅と薬湯の集い」は、三水会の恒例行事となつていく。そして9月2日、36回目の集いとなった。

9月1日、前日より先行した箕岡代表ほか5名は徳本峠を経て山研へ。征矢・高橋両名は六百山を経て山研へ。2日、当日直行組は松本で食材などを仕入れて、山研へ直行した。

今回のメインは、豊田シェフのレシピによる「おでん」と「きのこご飯」である。だが、JAC会員ともなれば誰もが山では食料担当経験者。手の空いている者が次々と協力する。さらに、それぞれのザックからみやげの珍味を取り出され、次々と食卓へ並ぶ。

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です



上高地山研テラスにて

一方、ダイニングテーブルの隅では、開宴を待ちきれぬ面々が下界の酷暑を忘れ去つてのビールだ。女性会員の手慣れた協力も相まつての料理作り。献立の多様性にもかかわらず、予定の6時開宴より前に、1回目の乾杯が行なわれた。薬湯は会で用意した地酒のほか、寄進持参の吟醸酒、赤・白ワインなどが出そろい、効果充分で

ある。次々に運ばれる料理はどれも絶品だ。特に、とうがんスープは人気で、何度もおかわりが出る。一方、アニコロ餅は、本来左党にはタブー視されているようだが本会では鍋が空になるほどの人気だ。

懇談の集いは3時間あまり、翌日早発ちの者を除いては消灯時間まで続いた。

翌2日、焼岳登山組、鷹わたりで有名な白樺峠乗鞍高原組などは、きのこご飯のおにぎり弁当をザックに、上高地散策帰省組とに別れ、集会は楽しみのうちに終了した。

(勝田房治)

No	書名	著者/編者	発行	備考	価格
263	西域探検紀行全集1～15	深田久弥・江上波夫・長沢和俊	白水社	1966～75 函 帯	一括3000 各巻 300
278	横有恒全集Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	横有恒	五月書房	1991 函 帯	1,500
281	今西錦司全集第一巻～第十巻	今西錦司	講談社	S49・50 函なし	一括2000 各巻 300
291	新選覆刻 先蹤者	大島亮吉	大修館書店	S53 函	700
292	新選覆刻 山の繪本	尾崎喜八	大修館書店	S53 函	700
293	新選覆刻 ナンダ・コット登攀	竹節作太	大修館書店	S53 函	700
294	新選覆刻 白頭山	京都帝国大学白頭山遠征隊	大修館書店	S53 函	700
295	新選覆刻 日本山岳會會報	日本山岳會	大修館書店	S53 函	700
296	新選覆刻 山に描く	足立源一郎	大修館書店	S53 函	700
297	新選覆刻 ヒマラヤ行	鹿子木員信	大修館書店	S53 函	700
298	新選覆刻 富士案内	野中至	大修館書店	S53 函	700
299	新選覆刻 劔潭に逝ける人々	東京帝國大學山の會	大修館書店	S53 函	700
300	新選覆刻 山水無盡藏	小島烏水/丸山晚霞畫	大修館書店	S53 函	700
301	新選覆刻 山岳美觀	吉江喬松・武井眞澄	大修館書店	S53 函	700
302	新選覆刻 山岳礼拝	中村清太郎	大修館書店	S53 函	700
303	新選覆刻 西藏旅行記 上巻	河口慧海	大修館書店	S53 函	700
304	新選覆刻 西藏旅行記 下巻	河口慧海	大修館書店	S53 函	700
305	新選覆刻 アルピニストの手記	小島烏水	大修館書店	S53 函	700
367	新選覆刻 播隆上人筆鎗ヶ嶽繪図	播隆上人	大修館書店	S53 筒	700
368	新選覆刻 迦多賀嶽再興記・信州鎗ヶ嶽縁起	播隆上人	大修館書店	S53 包	700
369	新選覆刻 石狩日誌	松浦武四郎	大修館書店	S53 包	700
370	新選覆刻 歐洲山水奇勝	高島得三	大修館書店	S53 巻	700
371	新選覆刻 山岳紀行六種(私家版)	松浦武四郎	大修館書店	S53 函	700
372	新選覆刻 名山圖譜	谷文晁	大修館書店	S53 包	700
Y13	新選覆刻 The Playground of the Far East	Walter Weston	大修館書店	S53 函	700
306	新選覆刻 日本の山岳名著解題	日本山岳会	大修館書店	S53 函	700
			291～306・367～372・Y13 一括		15,000
321	花火の見た家	串田孫一	創文社	S35 函 *著者署名あり	800
322	漂泊	串田孫一	創文社	S47 函 *著者署名あり	800
329	目で見える日本登山史 日本登山史年表	山と溪谷社編	山と溪谷社	2005 函 *2冊組	2,500
330	ヒマラヤへの挑戦 8000m峰 登頂記録 1・2・3	日本ヒマラヤ協会	アテネ書房	1991 函	一括3000 各巻1000
347	アルプスヒマラヤ處女峰登攀史	藤田信道訳	山と溪谷社	S6	1,000
Y2	EVEREST South West Face	Chris Bonington	Hodder and Stoughton	1973 *英語	500
Y3	The Ascent of Everest	Jhon Hunt	Hodder and Stoughton	1965 *英語	500
Y4	Broad Peak	Marcus Schmuck	Verlag das Bergland-Buch	1958 *独語	500
Y6	KATMANDU	Colin Simpson	Angus and Robertson	1967 *英語	500
Y7	Chronique Himakayanne	Marcel Kurz	Fondation Suisse pour Explorations Alpines	1959 函 *仏語	500
Y8	新選覆刻 The Playground of the Far East	Walter Weston	大修館書店	S53 *英語	700
Y14	Illustrated Atlas of the Himalaya	David Zurick/Julson Pacheco		2006 *英語	500
Y16	The Lion River The Indus	Jean Fairley	The John Day Company	1975 *英語	500
Y17	Alaska The Great Land	Mike Miller、Peggy Wayburn	A Sierra Club Landform Book	1974 *英語	500
Y19	The Mjastic Rocky Mountains	William S.Ellis	National Geographic Society	1976 *英語	500
Y20	Sivalaya The 8000metre peaks of the Himalaya	Louis Baume	Gastons-West Col Publications	1978 *英語	500
Y21	Mountaineering: A Bibliography of Books in English to1974	Chess Krawczyk	The Scarecrow Press, Inc.	1977 *英語	500
Y22	White Hell of the North	Joseph Crad	Sampson Low	*英語	500

● 頒布価格が500円以下の和書と、400円以下の洋書を省略しています。全目録(約400冊)はホームページ(図書委員会)から検索できます。また、必要な方にはお送りしますので、お申し出ください。

● 目録の申込み、問合せは三好まき子まで ☎ (090-8019-8601) ✉ 344mm@mbe.nifty.com

図書交換会出品目録および購入申込みの案内

今年度の「図書交換会」は、12月1日(土)に開催される年次晩餐会で開催します。多くの会員の参加をお待ちします。交換会当日の詳細は18ページの「インフォメーション」に掲載していますが、当日に来場できない方は、下記の要領で購入の申込みを行なってください。

- 郵便(日本山岳会・図書委員会あて)またはメール(344mm@mbe.nifty.com)で、11月15日までに申込みください。
- 購入希望図書の番号、書名、購入希望者の名前と会員番号を必ずご記入ください。入札本(★印1～4)の場合も、入札価格を明記のうえ、同じ要領でお申込みください。
- 複数の申込みがあった場合は、当日、会場で抽選を行ないます。来場できない方の抽選は、図書委員が代行します。
- 全集やシリーズ本の申込みは、一括購入が優先となります。
- 購入図書の送料は購入者負担とし、交換会終了後に代金と一緒に請求させていただきます。

No	書名	著者/編者	発行	備考	価格
★1	ヒマラヤへの挑戦 1783-1939	C.E.アンジェル/近藤等譯	朋文堂	S18	最低価格2000円から入札
★2	伊那谷木曾谷	細井吉蔵	三省堂	S12 函	最低価格3000円から入札
★3	辻まこと山とスキーの広告画文集	辻まこと	秀山荘	S56	最低価格2000円から入札
★4	Scrambles amongst the Alps in the Years 1860-69	Edward Whymper	John Murray	1871 2版	最低価格2000円から入札
11	世界山岳全集1～13	日高信六郎ほか	朋文堂	S34～36 函	一括4000・各巻400
25	ヒマラヤの旅	長谷川傳二郎	図書刊行会	S50 函 *復刻本 ヒマラヤ地図付き	1,000
44	覆刻 日本アルプスと秩父巡禮	田部重治	大修館書店	S50 函	700
48	覆刻 氷河と万年雪の山	小島烏水	大修館書店	S50 函	700
53	山・よき仲間	成瀬岩雄	茗溪堂	S37 函 *限定500部のうち148	1,500
54	覆刻 山と雪の日記	板倉勝宣	大修館書店	S50 函	700
74	白川義員作品集 中国大陸(下巻)天壤無限	白川義員	小学館	S59 函(二重)	1,500
87	アンナブルナ南壁	クリス・ボニントン/山崎安治訳	白水社	1972 函 訳者署名あり	800
134	覆刻 スウィス日記	辻村伊助	大修館書店	S50 函	700
135	新選覆刻 先蹤者	大島亮吉	大修館書店	S53 函	700
136	覆刻 山と雪の日記	板倉勝宣	大修館書店	S50 函	700
137	新選覆刻 山水無盡蔵	小島烏水/丸山晚霞畫	大修館書店	S53	700
138	覆刻 山岳省察	今西錦司	大修館書店	S50	700
157	異人たちの日本アルプス	庄田元男	日本山書の会	1990 函	800
161	原野から見た山	坂本直行	朋文堂	S32 函	1,000
166	本のある山旅	大森久雄	山と溪谷社	1996 帯 *著者署名あり	700
168	車窓の山旅 中央線から見える山	山村正光	実業之日本社	1985 帯	800
171	谷川岳研究	長越茂雄	朋文堂	S29	800
172	ヒマラヤの高峰 第一巻～第五巻	深田久弥	雪華社	1964・65 函	一括1500 各巻400
177	日本アルプス山人伝	安川茂雄	あかね書房	1971 函 帯	800
178	アルプスを描いた画家たち	近藤等	東京新聞出版局	S55	800
187	山 研究と随想	大島亮吉	岩波書店	S5	800
190	わが登高行 上・下巻	三田幸夫	茗溪堂	1979・80 函	1,200
217	山岳 第一巻・第二巻・第三巻	モーリス・エルゾーグ他/ 藤島敏男他訳	朋文堂	S32 函	1,500
225	花と人と 小田稔画文集	小田稔	小田稔	H5 *色紙・絵はがき付き 献呈署名あり	1,000
239	山岳湯仰	中村清太郎	生活社	S19	1,000
247	黒部溪谷	冠松次郎	アルス	S3 函	1,000
251	日本百名山	深田久弥	新潮社	S40 函	1,000
259	「日本百名山」の深田久弥と山の文学展	世田谷文学館	世田谷文学館	H7	800



図書紹介

田部井淳子・著／栗田貞多男・写真
『山の単語帳』



2012年8月
世界文化社刊
A5判 192頁
定価 1890円

私たちがふだん何気なく使っている山の言葉。ガイドブックでも多用されているので一般的な言葉なのかと思うと、若い山ガールや山ボーイには通じないことも多く、改めて登山の世界特有の言葉だったとわかることがある。

登山家、田部井淳子氏が若い登山入門者向けにそんな山の言葉を解説したのが本書である。

『山の単語帳』という題名からは無味乾燥な登山用語の解説書のようにも見えるが、ひも解いてみるとこれがなかなか面白い読み物である。

まず、それぞれの言葉につけられた栗田貞多男氏の写真がよい。解説文を読まなくても見ているだけでその言葉の意味が分かってくるような気がする。

しかし、写真もさることながら、言葉の解説が面白い。「偽ピーク」頂上の手前にあつて本当の頂上と間違えやすいピークのことです。あそこまで行けば登りから解放されると、ぬか喜びしないように気を付けましょう。最初の数ページを開いただけでうれしくなってしまうような解説が目飛び込んでくる。

初心者には山の言葉を説明するとき、口が滑つて余計なことをしやべつてしまい、それが聞いている人たちに受けることがある。そんなちよつと余計な話がそのまま解説になっているのである。「膝が笑う」下りで急ぎすぎて膝がぐくぐくになったとき、わたしも本

物の「ガク(岳)人になりましたと言つて笑ひあつたことがあります。今は笑う前に用心して静かに下るようにしています」。これなどは若い人たちから「おやじギャグ」と呼ばれているダジャレそのものである。

本書は16の章に分けられているが、章のキーワードも「山に登ろう」から始まつて「富士いろいろ」、「秋の彩り」、「雪山讃歌」、「岩の王国」など、山の魅力を伝えてやまない言葉ばかりである。

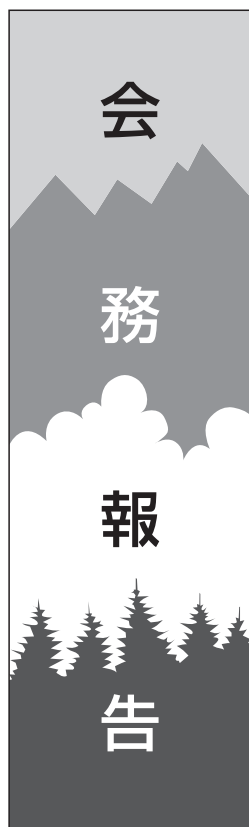
なぜか本書を見てみると、「山つて楽しいものだ」ということが自然に伝わってくる。なにも美しい表現や詩的な文があるわけではない。山の魅力、楽しさといったものが簡単な説明のなかにさりげなく配置されているのである。

後ろのページにはキスリング、ニッカボッカ、アノラック、ヤッケなど、今は使われなくなつてしまったなつかしい言葉が出てくる。もしかしたら本書は若者だけではなく、昔、山を楽しんでいた元山ガール山ボーイにも「山は楽しいから帰つてこい」と呼びかけているのかもしれない。

(近藤雅幸)

図書受入報告(2012年9月)

著者	書名	ページ/サイズ	発行元	刊行年	寄贈/購入別
菊地俊朗(文) 日本山岳写真協会(写真)	北アルプスの渓谷をゆく	151p / 30cm	信濃毎日新聞社	2012	発行者寄贈
寺田和雄(編)	千曲川源流紀行：信州南佐久 川上村をめぐる	206p / 19cm	茗溪堂	2012	著者寄贈
大町市立大町山岳博物館(編)	北アルプス登山史料2：白馬岳周辺登山史	314p / 30cm	大町市立大町山岳博物館	2012	発行者寄贈
全日本山岳写真協会(編)	山稜2012：2012年全日本山岳写真展作品集	210p / 22cm	全日本山岳写真協会	2012	発行者寄贈
松本市立博物館(編)	城山の自然と歴史(アルプス公園周辺ガイドブック)	103p / 22cm	松本市山と自然博物館	2012	発行者寄贈
山口耀久(著) 福島功夫(解説)	山頂への道(平凡社ライブラリー No.772)	361p / 16cm	平凡社	2012	出版社寄贈
角幡唯介	探検家、36歳の憂鬱	238p / 19cm	文藝春秋	2012	出版社寄贈
テンジン・ヌルプ(絵) 大谷映芳(編)	テンジン・ヌルプ絵画集：ヒマラヤ最奥の聖地から	19 × 26cm	アースワークスソサエティ	2011	発行者寄贈
野口邦和(監修) 日本勤労者山岳連盟(編)	放射線と登山道	79p / 21cm	桐書房	2012	編者寄贈
ディアス(著) 三井孝夫(訳)	ブランカ山脈・ワイワッシュ山脈：ブルー 2006-2007年版	180p / 22cm	三井孝夫(私家版)	2006	三井祥子氏寄贈
白須浄真	大谷探検隊研究の新たな地平	384p / 23cm	勉真出版	2012	購入
横浜山岳会(編著)	生涯登山を目指して：横浜山岳会創立80周年記念誌	368p / 26cm	横浜山岳会	2012	発行者寄贈
宮家準	修験道：その伝播と定着	340p / 21cm	法蔵館	2012	出版社寄贈
Sale, Richard	The Challenge of K2: A History of the Savage Mountain	227p / 24cm	Pen & Sword	2011	中村保氏寄贈



平成24年度第5回(9月度)理事会 議事録

日時 平成24年9月12日(水)19時～

21時

場所 日本山岳会集会室

【出席者】尾上会長、西村副会長、

高原・森・小林各常務理事、

野澤・中山・永田・萩原・

節田・古野・川瀬各理事、平

井監事

【欠席者】吉永副会長、浜崎監事

【オブザーバー】柏編集人

【審議事項】

1・日中韓三国学生交流登山の今後について(中山)

武漢で中国・韓国側と会談。両国の当該行事に対する高い評価をふまえ、議定書通り、2015年まで継続する。YOUTH CLUBの所管で行ない、経費についてはYOUTH CLUBの予算とは別に扱う。(承認)

報告

なお、本年は、中国主催で8月7日から14日武漢で行なわれ、学生は、日本隊5名、韓国隊10名、中国隊14名が参加。登山より交流に重点を置いた催しで、学生には評価が高く、いまだ学生の交流は続いている。

2・東海支部「猿投の森」隣接地受贈にかかわる協定書について(高原)

先般受贈した「猿投の森」隣接地について、本部と東海支部間でその使用に関する協定を結ぶ。(承認)

3・広島支部ルーム取得及び使用にかかわる協定書について(高原)

先般購入した「支部ルーム」について、本部と広島支部間で、その取得及び使用に関する協定を結ぶ。(承認)

4・委員会の新設について(西村、高原)

常務理事会で検討してきた組

織改善の一環で、以下の委員会を24年10月1日に新設する。

①当初の目的を遂げた「法人運営適正化PT」を、今後の諸問題に対応するため、「公益法人運営委員会」と改称し常設の委員会にする。

PT同様、担当理事には吉永副会長、委員長には佐野リーダーがあたり。

②広報的な活動が増えている「インターネット小委員会」を総務委員会から独立した委員会とし、「デジタルメディア委員会」と改称する。担当理事には永田理事、委員長には多田委員長があたり。(承認)

5・委員会規程の一部改正について(高原)

組織改善の一環として、委員会規程を24年10月1日に一部改正をする。

①4条に委員資格として入会後2年間のインタバルがあったが、これを廃止する。

②第5条の委員定数「20名程度」を現実的な「原則として20名程度まで」にする。

③第6条及び第7条の予算や決算報告などの提出・報告期限を明確にする。

改正案の第7条で、事業報告の提出日を、4月末日から4月15日に訂正する。(承認)

6・「山はみんなの宝」憲章制定賛同呼びかけ人について(尾上)

継続審議であった当該依頼について、「山はみんなの宝」憲章制定委員会の上氏に説明を求めた。運動の主旨は理解でき、賛同にため、当該依頼に応じる。(承認)

7・会長特別表彰候補について(高原)

チョモランマ登頂最高齢記録を塗り替えた渡邊玉枝会員を会長特別表彰候補として推薦する。(承認)

8・収益事業・会員サービス事業PTメンバーについて(節田)

以下の会員をメンバーとする。大蔵喜福(10539)、中村達(14239)、山口章(15072)(承認)

9・ルーム検討PTメンバー追加について(森)

以下の会員をメンバーに追加する。

神崎忠男(6002)(承認)

10・入会希望者について(高原)

24名の申し込みがあった。

(承認)

【報告事項】

1・PT報告

①ルーム検討PT(森) 会長から、資料および図書の保管・管理場所を検討し、空いたスペースを会議室として検討するよう依頼を受けた。当PTでは同意する旨を会長に報告した。具体案は、担当理事を中心に理事会で検討することとした。

②「山の日」制定PT(萩原) 「山の日」ネットワーク東京会議(10月3日国立オリンピック記念青少年総合センター)を開催するにあたって、「山の日」制定協議会として正式なプログラムを決定した。総合同会を尾形日山協専務理事、基調講演を船村徹会員が行なう。予算100万円は山岳5団体で負担する。

2・24年4月～8月の会計実績状況について(小林)

資料により報告があった。支出は前年度と同じだが入会者が増え、入会金会費収入は下げ止まったとみている。

3・寄付の受入れ報告(広島、福島支部)について(小林)

支部ルームの什器備品購入のため、会員および支部友会員117名から広島支部に347万5000円の寄付があった。また、パキスタン未踏峰登山の資金として福島支部に45名から45万4000円の寄付があった。

4・高尾の森親子森林体験スクール覚書について(高原)

以前より京王電鉄(株)と当会高尾の森づくりの会で共催していた当該体験スクールについて、改めて両者で覚書を交わした。

5・カシオ腕時計頒布覚書について(高原)

24年9月より受付を開始するカシオ腕時計頒布について、カシオマーケティングアドバンス(株)と当会が覚書を交わした。

6・大町山岳博物館より寄託資料(写真)掲載許可申請について(高原)

「スイス山岳観光の黄金期と日本人」で使用する写真の掲載を承認した。

7・(株)NHKエンタープライズより「NHKオンデマンド」配信許可願について(高原)

承認した。

8・舟橋栄子会員より、マナスル

資料撮影及びビデオ作品への掲載許可について(高原)

承認した。

9・池田常道会員より「横さん一行のアイガー写真」の転載許可願について(高原)

承認した。

10・集会委員会より、晩餐会記念山行での配付タオルにロゴマーク使用願について(高原)

承認した。

11・学生部インド・ザンスカール登山隊について(高原)

8月23日付けの朝日新聞に掲載された。

12・支部の並び順序について(高原)

曖昧だった支部の並びを、全国地方公共団体コードに準拠することに総務委員会決定した。

13・年次晩餐会について(高原)

今年度の年次晩餐会では図書委員会が図書交換会を行なう。また来年度の晩餐会について、開催場所、その他方法についての意見をいただきたい。

14・会員資格復活による永年会員について(高原)

宇田川会員から永年会員の申請があった。旧会員在籍年数を検

討の上、永年会員と判断した。

15・日本山岳遺産基金よりの報告について(高原)

7月21日、22日に「マナー&クリンアップ・チャレンジin尾瀬」を行なった。

16・『山』9月号について(栢)

日中韓三国学生交流登山報告、寄付についての記事などを掲載の予定。

17・名誉会員の推薦について(高原)

当該理事は、9月末までに所定書類で行なうよう依頼があった。

【今後の予定】

1・評議員懇談会(9月28日15時より)初開催となる。

2・当会主催行事の弁護士による法的問題勉強会(11月15日予定)

3・第2回委員長・PTリーダー会議(平成25年1月予定)

4・第44回新人会員オリエンテーション(10月27日)

5・ウインターミーティングの開催(於：山研 2月)

6・2012岳都・松本「山岳フォーラム」(11月25日)参加について

尾上会長出席。また成川「山の日」制定協議会代表幹事が「山の

日」の報告のため出席する。
7・播隆上人企画展(9月28日より)
8・都岳連講習会(気象、基礎技術他) 3件
9・ライチョウ会議岐阜大会(10月13日～15日)
10・国立登山研修所主催の「安全登山普及指導者中央研修会」(11月2日～4日)
YOUTH CLUBより3名出席予定。

ルーム日誌 9月

1日 千葉支部 自然保護委員会
3日 総務委員会 高尾の森づくりの会 **YOUTH CLUB**
4日 図書委員会 スケッチクラブ
5日 **YOUTH CLUB** 集会委員会 法人化PT
6日 常務理事会
7日 **YOUTH CLUB**
10日 青年部 スキークラブ スケッチクラブ
11日 図書委員会 山岳研究所運営委員会 インターネット小委員会 九五会
12日 休山会 理事会 自然保護委員会 山想倶楽部

13日 フォトビデオクラブ 山岳地理クラブ
15日 SUN燦会 山の自然学研究会
18日 01会 図書管理委員会 資料映像委員会 スキークラブ
19日 三水会
20日 二火会 科学委員会 海外委員会 つくも会
21日 支部活性化PT 00会
24日 フォトビデオクラブ 総務委員会 **YOUTH CLUB**
25日 **YOUTH CLUB**
26日 緑爽会 自然保護委員会 麗山会 みちのり山の会
27日 学生部 山遊会 法人運営適正化PT
28日 評議員懇談会
29日 土曜会 01会
9月来室者495名

会員異動(9月)

物故

横山征平(12270) 12・8・30
 百田高子(11135) 12・6・30

退会

田畑真一(6217)
 片柳 洋(14914) 栃木
 片柳澄子(14915) 栃木

I N F
O R M

インフォメーション

A I
O N

◆年次晩餐会開催のご案内

総務委員会

本年の催物は、図書委員会主催の図書交換会です。400冊の蔵書を、広い会場でたくさんの方々の手に見ていただけるようにしました。

講演会は、女性で世界最年長でエベレスト登頂された渡邊玉枝さんを予定しています。

どうぞご期待下さい。(詳細は『山』11月でご案内いたします)

期日 12月1日(土)

場所 品川プリンスホテル・アネックスタワー5階(JR品川駅前)

◆第30回図書交換会

図書委員会

恒例の図書交換会を、今年は年次晩餐会で開催します。(出品目録は12・13ページに掲載)

13時30分から開場し、陳列した

本をご覧いただけます。じっくり本を選びたい方は早めにご来場ください。14時から購入申込を開始します。なお、年次晩餐会に出席されない会員も参加できます。例年通り、事前申込みも受付けます。

日時 12月1日(土)14時から購入申込みを開始

場所 品川プリンスホテル 年次晩餐会会場 展示会コーナー

問合 三好まき子 TEL 090(8019)8601

✉ 344mm@mbe.nifty.com

◆晩餐会記念山行のご案内

集会委員会

今年の晩餐会記念山行は、愛鷹連峰最高峰の「越前岳」に登ります。冠雪した富士山が眼前に迫り、遙か遠くには相模湾が光っていることでしょう。素晴らしい展望をお楽しみください。往復とも、貸し切りバスを利用します。

日時 12月2日(日)雨天決行

場所 愛鷹連峰「越前岳」

集合 JR品川駅港南口 7時半

解散 JR品川駅港南口 17時半

を予定

費用 3000円(往復バス代、写真代等)

申込 年次晩餐会への出欠とあわせてお申込みください。

*申込者に詳細案内を送ります。

◆講演会——ニュース映画にみる「山の報道」 東京多摩支部

谷川岳一ノ倉沢の宙吊り遭難、薬師岳での愛知大学生遭難など、昭和時代の映像を上映。

ニュースカメラマンとして活躍した羽田栄治会員に、当時の世相を振り返っていただきます。

日時 11月10日(土)18～20時

会場 立川市女性総合センター・アイム アイムホール(立川市曙町2-36-2)

講師 羽田栄治会員

定員 先着180名

問合 岡義雄 TEL 090(2141)5057

✉ okayoshio@ozio.jp

*入場無料。

◆戸狩温泉スキー懇親会

25年1月のスキー懇親会は戸狩温泉スキー場にて開催します。

現地集合・現地解散。

日程 平成25年1月20日(日)～22日

費用 スキー参加者…2万2000円/スノーシュー参加者…2万3000円+ガイド費用別途徴収(通信費、保険料、懇親会費用等含む)

宿泊 戸狩温泉(民宿メープルハイム)

定員 30名

申込 12月20日までに、ハガキ、

日本山岳会団体傷害保険
加入のすすめ

加入対象者(被保険者):日本山岳会会員の皆様
会員の方がご加入の場合、配偶者、お子様、ご両親、ご兄弟、会員ご本人の同居の親族及び同居の使用人の方も同時にご加入いただけます。

中途加入可能です。まずは、資料請求下さい!

海外登山の保険、その他損害保険・生命保険全般ご相談も承ります。

東京海上日動火災グループ代理店 株式会社東海日動パートナーズ東京
団体傷害保険資料請求担当: 藤田 Mail: a.fujita@tnp-higashitokyo.co.jp
TEL.0120-161-808 FAX.0120-161-809

FAX、メールで高橋聰
(〒102-0072 千代田区飯田橋
2-12-10
FAX 03(3222)0908
sto@orion.ocn.ne.jp)

*申込者に詳細案内を送ります。

◆「小島鳥水祭」計画について

四国支部は、2013(平成25)年4月13(土)と14日(日)に香川県高松市内で「小島鳥水祭」開催を予定しています。鳥水は来年、生誕140年を迎え、節目の年にあたることから第1回目の記念開催は特に全国から大勢の会員の出席を願っています。

13日、香川県内の観光巡りと前夜祭を開く。夕方からはホテルで前夜祭を行ないます。

14日、記念式典。鳥水の顕彰碑を建立する高松市内の峰山公園で除幕式を行ないます。この後、記念講演会を予定。

詳細な日時やスケジュール、受付要項など、改めてご案内します。

◆「ヒマラヤの自然と環境と夢を語る」シンポジウム

貴重な自然環境でありながら、

人間が作り出す環境問題とも直面しているヒマラヤについて、栗城史多さん、谷口けいさん、野口健さんがヒマラヤの魅力と自然について語る会。

日時 11月30日 18時30分〜21時
場所 六本木ヒルズハリウッドプラザ・ハリウッドホール

定員 400名(先着順)

参加費(懇親会費込み)一般3000円、会員・学生2500円

主催 日本ネパール協会

後援 日本山岳会ほか

『木の目草の芽』9月号を発行

自然保護委員会

自然保護委員会機関紙『木の目草の芽』9月号(最新号)を発行しました。100号記念となる今号は、発刊当時から編集担当委員による鼎談記事や記念メッセージのほか、尾瀬全国集会での「分科会全体討議」、「支部報告」を掲載しています。

機関紙は年6回隔月発行、購読料は年間千円(送料込み)です。購読希望の方は左記までご連絡ください。

・申し込み：川口章子

TEL 047(463)8721

syuaki@pony.ocn.ne.jp

・振込先(郵便振替)：00180

4710688 加入者

川口章子

問合 (社)日本ネパール協会
TEL 03-3491-0314
(平日13〜17時)

■岩橋崇至写真展「山の組曲」北アルプス〜

人を育む自然の素晴らしさを次世代につなげていきたいという強い思いが込められた北アルプスの作品20点を紹介します。

期間 11月13日(火)〜12月27日(木)

(9〜17時、月曜休館)

会場 田淵行男記念館(長野県安曇野市豊科南穂高507

8-2 TEL 0263(72)9964)

入場料 300円(高校生以上)

*岩橋崇至ギャラリートーク&サイン会を、11月13日(火)10時30分より開催。

■『山岳』第百七年で訂正

204ページの『ビジュアル版 世界の探検大百科』の定価が「1500円+税」は、「1万5000円+税」の誤りでした。訂正して、お詫びします。(山岳編集委員会)

■訂正とお詫び

9月(808)号5ページ、追悼記事、

坂本矩祥氏のプロフィールの「2012年6月24日、逝去」は、「2012年6月23日、逝去」の誤りでした。訂正して、お詫びします。

◆編集後記◆

●今月は、福島支部によるカラコルム未踏峰登頂や埼玉支部のインドネシア登山などの活動レポートが寄せられました。また学生部からはザンスカール未踏峰登頂の便りも届いています(今年中に掲載予定)。国内外問わず、登山やそのほかの活動報告が会報をにぎやかに飾るのはうれしいことです。今後ともお寄せください。

●巻頭は飯田肇会員に立山連峰の積雪環境と氷河について解説してもらいました。4年間の調査は、日本初の現在も活動する氷河発見に結びつきました。(柏澄子)

日本山岳会会報 山 809号

2012年(平成24年)10月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 尾上 昇
編集人 柏 澄子
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社